アフリカでの7日間：第73回 IFLA ダーバン大会参加の記（南アフリカ連邦，2007年8月19日～23日）

依田 和子*

よこはまライブラリーフレンド

I. はじめに

私は、2005年からIFLA 児童青少年分科会の常任委員として、オスロ、ソウルそして2007年のダーバンと3回続けて大会に参加しています。それまでもバンコクやコペンハーゲンでの大会に参加したことはありましたが、委員になってみると、次から次へと大会にむけての課題がメールで送られてきて、それまでの半分観光気分の気楽な参加とはまったく違ったことになってしまいました。ここで、IFLAの分科会の委員になるまでの経緯をすこし記したいと思います。

私が、日本図書館協会（以後、日図協）の児童青少年委員会（以後、委員会）委員になったのは、2001年4月のことでした。所属は「よこはまライブラリーフレンド」という市民団体で、1995年の設立以来「図書館と利用者をつなぐ」あるいは「図書館を守り育てる」活動をしています。また、30年以上、文庫活動と文庫研究を続けながら、主として英米の子どもの本の研究もしています。ここ10年ほどは、読み聞かせボランティアを対象にした絵本講座の講師をしてきましたが、最近では大学で児童文学と司書教諭科目を教えています。

さて、しばらく日図協の委員を続けていくうちに、IFLAの児童青少年分科会の常任委員になってはどうかというお誘いが委員会からあり、日図協の理事長の推薦状を添付してIFLA本部に申請をしました。ほどなく受理したとの連絡が届きましたが、「任期は4年（再選1回）、任期中は毎年夏の大会と2月か3月のミッドイヤー・ミーティングへ参加することが望ましく、参加にかかる費用は自己負担である」ことに同意することが前提条件で誓約書にサインをして2005年8月、委員に就任しました。

児童青少年分科会の委員の内訳は、現在オランダ1名（新委員長）、フランス2名、デンマーク1名、ノルウェー

1名、ドイツ1名、クロアチア1名、イタリア1名、ロシア1名、アメリカ2名、シンガポール1名、韓国1名、日本2名の計15名です。日本からは国立国会図書館の佐藤尚子さんが私と同じ時期から委員を務めておられます。委員にヨーロッパの人が多いこともあって、春のミーティングは、ヨーロッパで行われることが多く、2006年コペンハーゲン、2007年モスクワ、2008年は再びコペンハーゲンで開催される予定です。

II. ダーバン大会

1. 概要

“Libraries for the future : Progress, Development & Partnerships”

上記英文は、2007年IFLA年次大会のテーマです。図書館雑誌などでは「未来のための図書館：進歩・発展・協力」と訳されています。

今大会の目的は、会長のスピーチによると「アパルトヘイト廃止後の選挙でネルソン・マンデラさんが大統領になってから13年経った今、公平で公正な社会を築き上げるためには、世界規模の情報化社会の創設と図書館の重要性をすべての人に認識してもらう必要がある」ということようです。また、2007年は、LIASA (The Library and Information Association of South Africa : 南アフリカ連邦図書館・情報協会) 設立10年目の記念すべき年でもあるので、アフリカでの図書館の役割を内外に喚起する目的もあったと思われます。

今大会は2007年8月19日から23日までの5日間、インターナショナル・コンベンション・センター (ICC) で行われました。委員はこの前後に1日ずつ会合に出席しますので、実質1週間の滞在となります。初日の会合では春のミーティングの報告、今回の大会での進行、新しいメンバーの紹介などが話題となりました。事前の許可を得ればオブザーバーの出席も認められます。今回も開催地南アや来年の開催地ケベックシティからの出席

*Kazuko YODA : 〒247-0003 神奈川県横浜市栄区鍛冶ヶ谷町452-27. (2007年10月3日 受理)

者がありました。

大会の参加者数は117カ国から3,000名余，そのうちアフリカ大陸からの参加者が1,000名余だったようです。日本の参加者は27名，韓国80名，中国100名ほどが参加していたとのことでした。

IFLAの組織上の構成はⅠ～Ⅷの部会がそれぞれ3～8の分科会に分かれています。児童青少年分科会はⅢの公共部会に属していますが，今回の大会では同じ部会内の多文化分科会と合同のプログラムも組みました。このように関連する分科会が合同でプログラムを組むことは今回も含めて多々あります。割り当て時間数が分科会ごとに決まっているので，他の分科会と合同にすると全体の時間数が多くなるし，参加者数も増すからのようです。

2. ダーバンの町の様子

ダーバンは，成田からシンガポール経由でほぼ1日かかるヨハネスブルグから，さらに飛行機で1時間ほどのインド洋に面した港町にあります。大会要綱の中にも「勝手に街中を歩き回らないように」との注意書きがあったのですが，ホテルに着いて大会会場までの移動手段をフロントで聞いたところ，歩けば10分程度だが，歩いていけないほうがいいと言われてしまいました。地図でみるとほんのわずかしき離れていないし，気温も20度前後で，歩くのに最適なのですが，治安があまりよくないので，昼間でも外国人が歩くのには適さないようです。仕方がないので，大会中はずっと会場とホテルを循環しているシャトルバスか，タクシーを利用することになりました。今回自由に歩いた唯一の道のりは，ホテルの斜め向かいのシティーホールの一隅にある市立中央図書館見学に行った後，ホテルに戻るまでの数十メートルだけでした。

3. オープニング・セレモニー

今回の開会式の司会は，作家・詩人・ストーリーテラー・エンターテイナーである南ア在住のチーナ・ムショーペさんでした。実は私は2004年にケープタウンで開催された国際児童図書評議会（IBBY）の大会に参加し，チーナの語りをきいたことがあり，そのエネルギーがパフォーマン스가ずっと心に残っていました。もしかして？と思っていたら，子どもたちと共に舞台上に司会者として登場したのは，まさしくチーナでした。セレモニーは，壇上の子どもたちが大きな本を開いていくと，本のページ上に次々にプログラムが展開するという形式で進行し，チーナが次々登壇するスピーカーを

魅力あふれる表現で紹介していくという，まさにIFLA大会にぴったりのアイデアでした。本と図書館の魅力をいろいろな表現で伝えるチーナの語りを聞いていると，参加者はあたかも物語世界に誘いこまれたような気持ちになったのではないのでしょうか。

来賓の中で皆が一番心を動かされたのは，数年の国外追放の後，南アの民主化に尽力し，1994年の民主選挙の後，当時のネルソン・マンデラ大統領から新しい憲法裁判所の仕事を任されたアルビー・サックス（Albie Sachs）判事のスピーチだったと思います。「図書館は退屈なところだ。会議も退屈なものだ…」とユーモアたっぷりに始まった彼のスピーチからは，暗殺未遂や投獄といった厳しい現実にもなお衰えない祖国への熱い思いが伝わってきました。また「刑務所図書館の本が心の支えだった」という図書館と本の重要性を説く静かな語り口も心に沁みて，彼を知ったことだけでもダーバンに来た意味があると思わせるものでした。IFLA Express no.3の紹介文によると，サックスさんの著作は8冊，そのうちの *The Jail Diary*（『獄中日記』）はロイヤル・シェークスピア・カンパニーが上演したり，BBCのテレビやラジオでも放映されたとのことでした。残念ながら，今のところ日本語訳は1冊も出版されていないようです。

4. 多文化サービスに関するスピーチ

今回私は8月21日午後1時45分から3時45分までの多文化と児童青少年分科会合同のセッションに発表者として参加しました。発表者は，南アから2名，ノルウェーから1名それに私の4名でした。全体のタイトルは Multilingual Library Services to Multilingual Families（「図書館における多言語家族への多言語サービス」），私

スピーチの様子

後で質問に答えている筆者（右から二人目）

の発表のタイトルは“Facilitating Multilingual Library Services in Japan”（日本の図書館における多言語サービスの推進のために必要なこと）。概要は、国立国会図書館・国際子ども図書館、地域の公共図書館、学校図書館、UNESCOなどの国際組織、ボランティアやNGO等が、互いの持ち味を生かしながら協力関係を結んでいって、多文化・多言語サービスを推進していくことの必要性を事例をあげながら述べたものです。

今回日本からの発表者は、私1人だったようですが（日本からダーバンまでは1日以上かかるので、昨年のソウル大会と比べると参加者自体がとても少なかった）、ポスターセッションに福島県立図書館の鈴木史穂さんが参加していらしかったので、こういった参加も日本の状況を知ってもらえるいいチャンスではないかと思いました。鈴木さんのタイトルは“Information Classification for Children-Comparison between some category search system and Nippon Decimal Classification”（子どものための情報分類ーカテゴリ検索とNDCとの比較）。概要は、NDCとインターネット上の情報を調べるカテゴリ検索の分類（Yahoo きっず！ JAPAN「きっずカテゴリ」）とを比較し、子どもたちを、複数の知識の入り口から知識の体系へと導き、本とインターネット上の情報の両方に導くためのナビゲーション・システムについて考察したものだそうです。

5. 印象に残った発表

委員をしていることもあって、90ほどあったセッションのうち私が参加したのはほとんどが児童と多文化に関わるものでした。その中で特に印象に残ったのは、Tzaneen（ツァネーン、南アの北部地方リンボボ州・クルーガー国立公園の近く）で実施されている“Paired

鈴木さんのポスターセッション no.66

Reading”（二人で絵本を読む）です^{注1）}。

これは高校生がチューターとなって近くのファーム・スクールに通う小学生（農場で働いている人たちの子ども。親はほとんどが非識字）とひとりずつペアを組み、木陰などで一緒に声にだして絵本を読むという活動です。チューターは小学生が一人で絵本が読めるようになるよう手助けをしますが、あくまでも楽しみのための読書であって、結果の評価はしないそうです。Tzaneen 地域では3つの高校と5つのファーム・スクールが参加しているそうですが、小学生たちの読書力向上をめざしていたのが、小学生・高校生双方が絵本の楽しみを知るという予想外の好結果ももたらしたそうです。

日本の学校・幼稚園・集会所などで、大勢の子どもを

Paired Reading の様子

前に、主としてお母さんたちが読み聞かせをするという光景を見慣れていた私にとって、このふたりで絵本を読むという活動は、とても新鮮でした。年上の子が年下の子どもに本を読んであげるという光景は、日本でも文庫などで見られる（見られた？）ように思いますが、今は行っているところが少ないのでしょうか？（参考：沖縄・武富島の「こぼし文庫」の活動が、2007年10月14日の朝日新聞朝刊13面に載っていました。）それぞれの子どもに即したゆったりとした読書は、人間同士の信頼関係も育んでくれるのではないかと私は思います。

Ⅲ. ダーバンの図書館

プログラムの中にいくつか図書館訪問が組まれていたのですが、スケジュールの都合でどれにも参加できませんでした。そこで、せめてダーバン市内の公立図書館を訪れたいと思い、友人数人と会議の合間をぬって、事前の申し込みもせずにダーバン市立中央図書館に行きました。

中央図書館はシティーホールの中であって、入り口を入ると、1階が図書館、2・3階が自然史博物館になっていました。まず博物館を見学しましたが、アフリカの動植物・昆虫の展示があったので、アフリカのサバンナを旅した気分を味わうことができました。

次に図書館のカウンターでIFLAの参加者であると話をし、見学をさせてほしいと頼みました。すると、職員の方が案内をしてくださって、日本人の著作なども探して見せてくださいました。いただいたパンフレットによると、この図書館の歴史は1853年にさかのぼることができるようです。1911年には現在の場所へ移り、以後社会の変化に応じて改築をしたり、分館を建設してきたということです。

児童室では大勢の子どもたちが友達と一緒に本を選んだり談笑したりしていました。英語の本が多いようでしたが、11ある公用語のうちのアフリカーンス語やズールー語の本も別置してありました（これは大人の本も同じ）。椅子にすわって本を読んでいた二人に話しかけたら、中学生の姉と小学生の弟ということで、お父さんに車で送ってきてもらって、しばらくしたら、また迎えに来てもらうとのことでした。全体の雰囲気は日本の図書館とさほどかわらないようでしたが、HIV/AIDSへの注意を促す展示物が児童室に張ってあるなど、ここがアフリカであるということをあらためて感じたものです。アフリカではエイズが大人のみならず、親を介して子どもにも伝染し、多くの地域で深刻な問題となっているようです。蔓延をくいとめるためには、次世代を生きる子

どもたちに正しい知識を教えることが急務で、図書館などの公共の場所は、広報活動の場としてふさわしいと思われれます。

HIV/AIDS 啓蒙の写真

Ⅳ. 日本人のボランティア活動

日本企業の社員で南アに駐在されている方々が移動図書館車（以後、図書館車）で活動をしていらっしゃるという情報を事前に入手していましたので、日本からの大会参加者のほぼ全員が出席して、活動の様子をうかがう機会を持ちました。グループ名はSAPESI（South African Primary Education Support Initiative：南アフリカ初等教育普及の会）、いただいた資料によると会員は、南アの人4名、日本人5名、車は、日本で使われていた図書館車をゆずりうけて、再利用しているとのこと。現在図書館車は20台で、対象校を年8回訪問し、学校では担当教師が本を借り出し、生徒たちの利用を管理します。図書館車には訓練を受けた南ア人の司書が同乗し、担当教師に本の選び方や授業での活用方法を指導・助言するそうです。当日お目にかかったのは日本人スタッフ3名で、日本ではボランティア活動をしたことはなかったそうですが、アフリカの現状をみて、子どもたちに本を届けたいという思いが強くなったそうです。アフリカでの図書館の活動は、TAAA（Together with Africa and Asia Association：アジア・アフリカと共に歩む会）が1996年から行っていて、それを手伝っていた方たちが、2006年5月、現地にNPO団体としてSAPESIを設立し、南アの文部省、日本外交協会、日本大使館などに働きかけをして、南ア文部省の識字力向上計画の一環として図書館車配備計画に協力していると

のことです。車の管理・運営は州政府が行い、日本から寄付された英語の本と草の根援助金等で購入したアフリカンス語やズールー語の本が町や村を巡っているそうです。

移動図書館車

V. おわりに

大会の最終日には、各種表彰、新役員の紹介、2010年の開催地の発表、次期開催地からのお誘い、などが行われました。今年は2年の任期の会長が交代する年で、オーストラリアのアレックス・バーンさんからドイツのクラウディア・ラックスさんに引き継がれました。また、2010年の開催地は、オーストラリアのプリズベーンに決まりました。ちなみに、2008年はカナダのケベックシティー、2009年はイタリアのミラノで開催の予定です。

大会に参加して、いつも感じるのですが、今年も世界中の大勢の図書館関係者に出会って、言葉を交わして、

これからの活動へのエネルギーをもらった思いがしています。こんなにも大勢の人々が世界各地で図書館振興のために努力しているのだと感じられる場合は、IFLA 年次大会以外にはありません。また、たくさんのセッションでの発表や話し合いが、それぞれの国で実践に生かされてはじめて成果となって表われるはずで、各分科会からガイドラインやマニフェストも出ていますので、参加されなかった方々も IFLA の Newsletter を参考にして、今後の図書館活動に生かしていただけたらと思います。

ダーバン後に向けた分科会の課題もたくさんもらってきましたので、それに向けて情報収集と原案づくりをしなくてはなりませんが、ダーバンで得た経験を日本の図書館関係者に伝えとともに、これからも日本の情報を発信する役目をになっていきたいと思っています。

注

- 1) 第三部門 Social inclusion: how can public libraries embrace the challenge of reaching out to serve all people in their community? The Right to Read (地域社会全体での取り組み:「コミュニティ内のすべての人々にサービスを提供するための試みを手助けするために、図書館は何ができるか?」)のうちの報告のひとつ。タイトルは“Paired Reading: encouraging reading for pleasure at farm schools through peer tutoring in the Great Tzaneen area”(二人で絵本を読む-Tzaneen地域のファーム・スクールで高校生と小学生が楽しみのために一緒に絵本を読む)。

参考

- 1) 2008年のテーマ:“Libraries without borders: Navigating towards global understanding”
- 2) IFLA Headquarters Website[internet]. <http://www.ifla.org>